

ブラック・ブレット～  
Perfect Answer～

哉識

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

「ガストレア戦争」西暦2021年、人類は突如現れたウイルス「ガストレアウイルス」との戦争に無残にも敗れ、ガストレアを退けることができる金属「バラニウム」で作られた「モノリス」という壁の内側に追いやられ、そこでの生活を余儀無くされていた。

しかし、人類はただ無抵抗な訳ではなかった。対ガストレア組織「民警」を作り、彼らは日夜自身の守るもののために戦っている。

それでも、人々がガストレアの恐怖を忘れることはなかった。

だから、人々はある夢を見る。理想を語る。自分に都合の良い都市伝説を語り始めた。

これはそんな都市伝説として語られた途方もない夢を見る兄妹の物語。

# 目次

プロローグ	1
第一話	7
第二話	18
第三話	34
第四話	44
第五話	50
第六話	65

# プロローグ

「蓮太郎くんはこんな話を聞いたことがあるかい？」

蓮太郎と呼ばれた少年は苦い顔をして、コーヒーの入ったビーカーを手に取る。

「あんたのそのもったいつけたしやべり方はどうにかなんねえのか？」

「よく言われるよ。まあ、きいてみたまえ。話というのは都市伝説。所謂、人が紡ぐ噂という奴だ。」

「先生、人と話せるのか？」

「君は私を何だと思ってるのかね」

「引きこもりの死体マニア」

蓮太郎はコーヒーを啜る。

「それはさておき」

「そうだな。話が進まねえ」

逃げたな、先生。

「その都市伝説というのは、IP民警序列最下位の噂だ」

続きをどうぞと、蓮太郎は目で答える。

「民警序列は強さを数値化したものだと言って差し支えない」

「まあ普通はそうだろうな」

「しかしその都市伝説はねえ、最強の民警は常に数が変化する序列の最下位から決して動かない一組のペアだと謳っている」

「それはない」

蓮太郎はやや辟易しながら、強く否定する。期待してた訳ではないがここまで拍子抜けの内容だともなろう。

「そもそも序列は勝手に決められるものだろう？……それに最下位にずっと甘んじる理由もないしな」

董は面白そうに微笑む。

「やはり君もそう思うか。私も同意見だよ。付け加えるならば、人は名誉欲を持つ生物だ。最下位であり続ける人間がいるならばそれはもう、ヒトではないだろう」

蓮太郎は逡巡して口を開く。

「先生、なんでこんな話したんだ？」

蓮太郎の知る限り彼女は人の意見に耳をあまり傾ける人ではないと思っている。今回の様なことは初めてだ。

「実はこの都市伝説、続きがあるらしいのだよ」

「続きっ？」

蓮太郎の表情を楽しむように董は話を続ける。

『完璧の答』《パーフェクトアンサー》という名前を知っているかい？」

「いや、知らないな」

蓮太郎は素っ気なく答える。

「やはり民警にも知られてないようだね。この二つの都市伝説はネット上で流行っているんだ」

おどけた董を蓮太郎は真剣な瞳で見据える。この都市伝説とやらが本当なのかどうかを。

現代の情報はかなり錯綜している。そのため、多くの偽の情報の中に嘘みたいな真実がまぎっているということも少しばあるのだ。

「パーフェクトアンサー、名は体を表すとは言ったものだね。男かどうかわからないが、彼は任務達成率は100%。どんな難しい任務でも必ずこなして帰ってくるそうだよ。故につけられた名前が『完璧の答』」

「マジかよ、どんな依頼でもなのか？」

「ああそうらしい。暗殺からガストレアの撃破、犬の散歩までやってくれるらしい。でも、少々値ははるようだがね」

「で、都市伝説の結びはこうか……序列最下位と『完璧の答』は同一人物である」  
「君はどう思う、蓮太郎くん」

蓮太郎は目を閉じる。依頼ならば人殺しすらもする。そして、依頼達成率は100パーセント。そんな夢物語があり得るのだろうか。そんな絵に描いたような人々の理想があり得るのだろうか。蓮太郎は久しぶりに真剣に思考する。

「……先生、俺にはわかんねえ。けど、もしもいるのなら会いたくはないな」  
「そうだね。狙われたらたまったもんじゃない」

董は笑うが、蓮太郎は苦笑することしか出来ない。

「もうこんな時間だし、今日は帰るよ。延寿も待つてるだろうし」

話の区切りが良かったので、蓮太郎が時計に目をやると時刻は夕食時にさしかかっていた。  
いた。

「ふむ、付き合ってくれてありがとう。延寿ちゃんにもよろしく伝えてくれ」

「ああ」

蓮太郎はドアに手を掛ける。

「完璧の答に狙われないように気を付けたまえ」

「……あんたこそな」

外に出ると日が落ち始めていた。蓮太郎は歩き始めるとドンと黒い物体とぶつかる。





「そういうわけだから、気にしないでくれ。悪かった、すまん」

「いえ、ここに……こちらの不注意ですので、ほんとすみません」

深々と頭を下げる黒ローブ。怪しきMAXの人物なことに変わりはないのだが、どうにもこの男を憎むことが蓮太郎は出来なかった。

「で、では、失礼します」

再び黒ローブは頭を深くさげ、そそくさとビクビクしながら歩いて行った。彼を目で追っていた蓮太郎も再び家路につく。

「世界もまだまだ広いな……」

蓮太郎の眩きは黒ローブの彼にも届かず、夕焼けの空に霧散した。

# 第一話

疲弊しきつた身体でドアを開け、背をドアに預けその場にへたり込み、

「し、死ぬかと思つたあああ」

マリアナ海溝よりも深い溜息をついた黒ローブを纏つた少年。

それを待つていた様に足音がして、長い黒髪少女が少年を満面の笑みで迎える。

「おかえりなさいっ、兄さん」

「ああ、ただいま、希」

ローブを脱いだ少年の顔があらわになる。その少年の顔はお世辞にもカッコいいとは言えず、多少整つてはいるが、十中八九、人は彼の顔を『悪い顔』していると言うだろう。目の下には濃いクマがあり、黒色の髪には寝癖が少々ついていた。

しかし、妹の方は掛け値なしの美少女である。肘ぐらいまで長く伸びた美しい黒髪、陶器の様に白く透き通る肌、スツとのびる手足、何よりもヒマワリが咲き誇るばかりの笑顔が彼女の可愛らしさをさらに引き立てていた。

「何かあつたんですか？完璧の答たる兄さんがこんなになつて」

「人とぶつかった。気を付けてただけどなあ、最下位《ワースト》らしく、夢見望《ゆめみ のぞむ》らしくやらかした」

望は弱々しいながらも立ち上がる。しかし望の期待していた最愛の妹からの労いの言葉ではなく、冷たい視線を感じる。

「兄さん、わたしに嘘ついてただね。人間恐怖症は治ったって言っていたのに……」  
「お、おかしいなあ〜治ったと思っただけ」

そっぽを向いて答える望。望は真正正銘、人間恐怖症かつ人間不信でありコミュ症引きこもり童貞の社会不適合者である。唯一、気を許せる人間が妹の希《のぞみ》だけ。ある条件を除き、希以外の他人とはまともに喋ることすらままならない。そして、

「超がつくほどの美人さんで誰にでも優しいうちの希ちゃんとは出来が違うんだから、仕方ないだろ」

自他ともに認めるシスコンでもある。……認めるほどの他人との面識があるのか、というのもまた別の話だが。

「嘘を吐いてたのは許さないけど、いつまでも手のかかるそんな兄さんもお世話できて私的には好きですけどね。兄さん、ご飯できてるよ」

希は望の手を引く。望の言った通り、希は類稀な美貌を持つ美少女で人当たりも良く、誰にでも優しくするので、人によく好かれる。そして、料理洗濯掃除家事ならなん

でもこなす。彼女の通つてゐる学校では絶大な人気を誇り、大きなファンクラブまであったと言われる。いわば、誰からも好かれる清楚系アイドルみたいなものだ。ちなみにファンクラブは開設一週間で何者かによつて滅ぼされた。その犯人は未だに不明である。

しかし、希には死守せねばならない重大な秘密がある。それは希が『呪われた子供』であること。それがばれてしまえば、今のような生活はできなくなつてしまう。あまりにも正反対の兄妹。オモテの世界に出られるのに合わなかつたウラの世界の兄。ウラの世界の人間のため、本来ならオモテの世界にいられないはずのオモテの妹。

お互いに無い物を持ち、ある物を持たない。そのせいか二人はお互いに依存し合ううになつてしまった。……特に望が。

「本當にわたしがいないとダメですね」

「まあな、このまま一生守つて欲しいまでである」

2人は並んでリビングに向かう。最近、希の方はなりを潜めてゐるようではある。が、望には悲しいかな年頃の乙女のこととは分からない。

「ま、またそんな適當こと言つて……少しは努力しようよ」

だから、希が必死に表情筋をコントロールしてゐることも当然、分からない。

「わたしが兄さんの側にいつまでもいるとは限らないんだよ？」

「何!? 男が出来たのか!? よし、電話番号と住所と名前を教えろ。今すぐ東京湾に沈めてくる」

「兄さん、わたしそんなこと言っていないし飛躍し過ぎ……」

今までの気怠そうな少年はどこに消えたのだろうか、今の望は行動力に満ち満ちていた。希は兄の通常運転ぶりに苦笑を隠せない。昔は逆だったという事を棚にあげ。

「しかし、今日も希の作ってくれる飯は美味しいな」

「愚問ですね、兄さん。わたしが兄さんのご飯を手抜きするとも?」

傍から聴いていると兄妹とは思えない会話に野暮な茶々が入る。

「電話……だね。こんな時間に誰だろう?」

希が受話器をとる。望は電話でもあまり話せないので希がいる時は希が電話に答えるという暗黙のルールがある。成分は希の優しさと諦めで構成されている。

「こんばんは、私です」

希は電話越しに聞き覚えのある、しかも一般家庭ならばあり得ない声を聞き取る。

「せ、聖天子さまっ、な、何かご用件でしょうか? ……あ、また兄が何かやったのでしょうか? 本当に申し訳ありません」

「希、お前は俺の保護者か?」

「似たようなものです」

「……言い返せないのが辛い。でも問題は起こしてないぞー……多分」

受話器の向こうで聖天子がクスクスと笑う声がある。希は少し恥ずかしくなり、切り換えて聖天子の用件を聞く。

「いえ、今日は『ワースト』に任務の依頼をするためにお電話させて頂きました」

希の纏う雰囲気が変わる。この少女が普通ではないことが手にとるように分かるほどに変わる。

「聖天子様毎度申し上げますが、直々にお電話を頂かなくとも……」

「私がしたくてしていませんから、お気になさらないでください。望さんには誠意を込めて依頼しなければなりませんから」

「……だそうです、兄さん。」

はあ、と溜息をつく望。望は相手が聖天子だというこの一本の電話に嫌な予感しかしていなかった。それに望は聖天子という人物像がよく分からない。何故か知らないのだが、やたらと世話を焼いてくるし、たまにこういういった依頼を極秘でしてくるし、と望にとつてよく分からない相手なのだ。

「何だ、聖天子？今、愛しの妹と自宅デートの真つ最中なんだが」

「ふふつ、そんな恥ずかしいこと素面で言えるのはあなたぐらいですよ。やっぱりあな

たはおもしろいですね。自宅デートとおっしゃいましたが、いつものことではありませんか」

手馴れてきたな、聖天子。一国の長を呼び捨てにする望は自分のことは棚にあげ、この国家元首殿はこんなことをして大丈夫なのだろうかと心配になる。でも、頭が大丈夫ではないのは明らかに望の方だった。

「それはさて置き、一市民の俺にんの用だ？ さっさと頼む。まだ希が作ってくれた飯食い終わってないんだよ」

「先日、ステージVガストレアを召喚することができた封印指定物が盗まれました」

さらつと言う聖天子。聖天子は軽く言っではいるが、下手すれば街一個簡単に滅ぼす事になりかねない緊急事態である。それをゆっくり吟味し望は口を開く。

「なるほどなるほど、それはそれは……何してんだよ」

「申し開きもありません。ですが貴方なら」

「取り返せる、か？」

聖天子の言葉を横取りする。望は少し苛立っていた。

「はあ、お前らが無能だという事と依頼の受ける受けないは置いといて質問がある」

「は、はい。どうぞ」

躊躇いもなく国家を無能呼ばわりした事に聖天子は相変わらず彼の傍若無人には驚



かざるを得ない。

「何故俺たちなんだ？ 実力はどうであれ、それだけの大事。もつと上位ランカーに頼むべきじゃないのか？ 例えば……そうだな、一桁位内の奴らとか」

「……できるだけ内密にことを終わらせたいので」

「へえ、その国家機密を知った奴は処刑つてか？ 相変わらずお国の考えることはクールだな」

望が茶化し気味に言っている事は正しい。最悪の場合、それも止む無しというのが会議での決定だった。しかし、全ての民警が全滅したら最後東京エリアの壊滅はまぬがれない。それでは元も子もない。だから、聖天子は秘密裏に個人的に頼める、かつ腕の立つ民警を探した。その腕の立つ民警が望である。

「事情は分かった」

「では」

「断る」

望は全ての事情を理解し、リスクリターンも考えた結果、この依頼を蹴った。

「な、何故ですか？ 報酬も用意しますし、もしものことがあれば貴方がたにも被害が及ぶのですよ！ 東京エリアが壊滅するかもしれないのですよ!!」

「そんなものは関係ない。俺は人類がどうなろうと知ったことではない。これは前から

知っているだろ」

「しかし……」

「理由は一つだ。もしも任務が平日だったら困るからだ。希の学校があるからな」

そう。望がこの依頼を蹴った理由は至極簡単である。ただ希のため、希のいつも通りのためだ。しかし、望は大きな勘違いをしていた。

「兄さん、ガストレアが襲ってくるなら学校どころの話じゃないんですけど」

「し、しまったああ。この国落ちれば良いのにとか思ったのが裏目に出ちまったああ」

「兄さんが学校に行っていないから、学校に行く感覚がなかっただけでしょ？」

希の鋭い（冷たい？）ツツコミに望はその場に崩れ落ちる。東京エリア壊滅はつまり、希の学校や友人も被害にあうということ。それは希の日常が壊れると同義である。友人がいない望はこのエリアが減びようと知った事ではないのだが、希がいる限り見て見ぬ振りはできないようだ。

「だけど、希は学校あるしどうしたらいいんだ？」

「私に聞かれても……」

聖天子は本当に困り果てた。国の長たる彼女を個人的にかつこの様な訳の分からぬ理由で困らせるのは世界広しと言えど、望ぐらいのものだろう。

「……望さん、後日今回の事件を依頼する民警を集め会議を開くのですが、それに出席し

「て頂けませんか？」

しかし、聖天子はとっさに思い付いた妙案をこれならばと口にする。

「その会議で民警の顔触れを確認し、奪還作戦が成功するかどうかを見極めて欲しいのです。もしも望さんが出来ないと判断した場合は『完璧の答』に依頼します」

「……」

望は沈黙せざるを得なかった。何故なら、こうなってしまったら望の退路は断たれたも同然だったからだ。

「……分かった。俺だけで構わないな」

「はい。……すみません、都合よく使ってしまったているようで」

「ほんと、それ。少しでも気になるようなら、羽振りよく頼む。これから希もお年頃なんぞでな」

「ふふつ、わかりました。善処します。詳細は会社の方を通してお伝えします」  
聖天子に一言言うべきか否か少し迷い、望は心配そうにつぶやく。

「……期待すんなよ。俺にも人にも」

しかし、聖天子は望の心情を知ってか知らずか真面目に受け答えた。

「私は信じてます。昔の様にみんなが手と手をとってあえる未来があることを」

「……そうか」

「はい。では、失礼します」

聖天子がそう言うのと電話は切れた。だから、電話は望の呟きを拾わなかった。

「じゃあお前と俺は敵なんだな」

望が電話を置くと希に見つめられている事に気付く。

「仕事？」

「まあな、ちよこつと民警の品定めをしてくる」

まだ残っている夕飯を食べてしまおうと望は座る。望にとって希が作った食事を残すことは万死に値する。今までもどんなに不味かろう失敗しようとする全ての料理を完食してきたという自負があった。

向かいに希も座ると言い辛そうに話しはじめる。

「まだ出来ない？」

「ん？ああ……まだ無理だな」

さつきまで流暢に話していた望だが、顔は疲れ切っていて、手は汗にまみれていた。これでも電話をできるようになっただけマシになっている。そんな汗まみれの手を情けなさそうに望は見つめる。

「ま、待てつ。今、汗まみれだから！」

突然掴まれ、逃げようとする望のかすかに震える手を希が優しく包み込む。その手は

暖かくぬくもりに満ち、望に安心を与えていた。そして、望は手の震えがだんだんと治まってくるのを感じる。

「兄さんがいくら拒絶しようとしたしはずっと側にいるから」

「俺が希を拒絶するとは思えないけどなあ……」

冗談抜きで生きてけないし、と子供のように望は赤面した顔を隠そうとする。望の手をしつかりと握る希はとても大人びた顔をしていた。

「でも、少しは治すように努力して欲しいですね」

「の、希ちゃんこれでも兄ちゃんは頑張ってるんですよ」

「ずっと一緒にいますから、頑張りましょうね」

希の笑顔は望の闇をいつも優しく振りほどく。この笑顔には幾度となく助けられてきたが、希は何故か望に社会復帰させようとする節がある。自分を思っていることだと分かっているが、正直社会復帰するつもりはさらさらない。

時がくれば滅ぼすつもりはこの世界に未練などさらさらないのでから。

この2人がIP民警序列最下位、通称『ワースト』夢見望と夢見希。また、何でも屋の夢見望。またの名を完璧の答《パーフェクトアンサー》。

## 第二話

聖天子からの仕事の依頼のあと、当日中に望たちが所属している民警会社から連絡があった。手を回すのが早いとも思ったが、それよりも驚くものがあった。

会議、明日なんですね。

「外に出るだけで覚悟が必要な俺にこの仕打ちはないわー」

望はいつものように黒いローブを深く着込み、人と目を合わせないように防衛省の中を歩いていた。

たびたび、怖いお兄さんがたに話しかけられたが、「聖天子様の依頼の件でちよつと」と言うのと、どういう事か通してもらえた。大丈夫かしら、ここの警備。実は顔割れてたりして……やだ何それ帰りたい。

対人関係の頼みの綱である希が学校のためいなので、挙動不審にはなりながらも指定された会議室にやつとのことまで到着する。ちなみに一番乗りだ。何でかつて？ 最初に来て、部屋のスミスを確保しないと絡まれるからだよ！ 分かってんだよ、この格好が怪しいことぐらいは！ 分かり過ぎて外に出ないまでである。他人に迷惑はかけたくない

からな。

閑話休題。望が到着してから、間も無くしてから徐々にスーツを着た民警の社長や無闇に敵意をばら撒いているプロモーター、インシエーターと思われる幼女たちが集まってくる。

プロモーターと思われる人間が入ってくるたびに望は睨まれたが、結局絡んでくる奴はいなかった。

何はともあれ時間もそこに過ぎ、席も満席になりつつあるので、望は聖天子の依頼通りざつと民警の顔触れを確認する。

(げっ)

あの顔は記憶に新しい。昨日、道でぶつかった少年だ。しかも、絡まれていらつしやる。望にしてみたら全くの他人事、ご苦労様ですと合掌し、高みの見物を決め込んだ。

「おいおい、最近の民警の質はどうなつてんだあ？ガキまで民警ごっこかよ。わけわかんなねえほら吹きも出てくるしよ。社会見学なら回れ右して帰れや」

あわれ、少年。しかし、イケメンで美人を侍らせてる時点では有罪である。非リア三原則(リア充を妬み、恨み、僻む)をモットーに望はよりいっそう隅に縮まる。あれ？この三原則、ほとんど一つじゃん。

「あそこにも見るからに怪しい奴はいるし、どうなつてんだあ？」

ひいつ、その怪しい奴つてももしかしなくても俺のことですよね……

髪をワックスで逆立て口元に鬍髯の模様を描かれたスカーフを巻いた青年が睨んでいる。相手には見えないだろうが、いきなり矢面に立たされかけている望はガタガタと震えていた。

(ふええ、希たすけて……)

ここにはいない最愛の妹に助けを求めるが、その声は無情にも(当然にも)届かない。しかし、あの世紀末スタイル似合いすぎだろ。黒光りするバラニウム製のバスターソードはとても様になっている。あのような大きな得物をここらで持っているならば、恐らくI P 序列1584位、伊熊将監しかないだろう。なかなか、腕の立つプロモーターと聞く。だが、見る限りおつむの方は弱そうだ。

けれども、絡まれた側の少年と美少女の名前は分からない。望は大抵の高序列のプロモーターやその雇い主である会社はマークしている。したがって、望があの人二人の所属している会社はわりと新しく、プロモーターの序列もあまり高くないと予測するのは難しくなかった。

しかし彼らからは序列や歳には見合わない底知れなさを感じた。所謂「こいつ、できる!」という雰囲気を持っている。どのような過去があるのかは知る由もないが少ない数の修羅場をくぐって来たのだろう。



だがしかし、ほとんどのプロモーターがイニシエーターを連れてきているというのに、彼らの傍らにイニシエーターの姿はない。どちらがプロモーターかは知らないけれど。

「用があるなら、自分から名乗れよ」

「ああ!!」

将監は臆すことなく自分に立ち向かって来た少年が気に入らなかつたようだ。少年にいきなり頭突きをかます。しかし、少年にダメージはなく、もうすでに臨戦体制に入っていた。

「おい、ガキ。プロモーターなら道具はどうした?」

「道具?」

「お前のイニシエーターのことだよ!!」

「道具……延珠を道具だ!!」

少年が叫ぶとそれが引き金になったように各々の得物を手をかける。

「やめたまえ、将監!!」

「三カ島さん!!」

二人の動きがピタリと止まる。少し荒げた声で将監を止めた男は三カ島ロイヤルガーターの社長だった。止められた将監は彼に不満をぶつける。

「だけど三カ島さん!!」

「私に従えないのなら、今すぐここから出て行け」

「……ちっ」

抜刀しそうになったバスターソードをしまいながら戻る将監。不満を隠すつもりはないらしい。

(惜しいな。もう少し続けばあの少年の腕が見れたのに)

恐らくこの場で誰一人として思っていないことが望の胸中だったりする。自分を巻き込まない争いなど望にとってはどうでもいいことだ。今の諍いも会議前の一興もしくは少年のお手並み拝見程度にしか思っていない。

「空席一か……先に忠告して置くが、この依頼を辞退する者は今すぐ退出願いたい。この依頼内容を聞くにあたって、途中辞退をできないことが条件だ」

荒事が一応の収集を見たあと、すぐに中年の男が現れ、随分と高圧的に忠告する。しかし、この脅し文句大丈夫ですかね？お国がブラック企業とか、勘弁して下さいよ、ほんと。

「……よろしい、辞退は無しということでは話を始めるとしよう」

男はそう言い残し、この部屋を去った。そして、彼が立っていた奥にELパネルが大きく映し出される。

『じきげんよう、皆さん』

会議室にいる全員（望以外）が起立、身体に緊張を走らせる。我が東京エリアの国家元首、聖天子だ。一瞬、聖天子は望に目配せしたが、気付いたのは望だけ。おおよそ、聖天子は怠け癖があると思っっている望に釘を刺したかったのだろう。

『今回の依頼は至極簡単です。昨日、エリア内にガストレアが侵入し、一名の男性をガストレア化させ、現在逃亡中です。民警の方々にはこのガストレアの駆除、及びこのガストレアが所持していると思われるケースを無傷で回収してきて欲しいのです』

ELパネルにジェルミンケースが表示され、聖天子が依頼の内容を説明する。望には話した最も重要な部分を除いて。案の定、民警側の反応は芳しくない。まずは第一段階は合格というところか、と望は値踏みする。任務だけでなく、何かを成すためには何よりも情報が不足してはいけない。情報不足は時に命に関わる。ここで二つ返事で受け答えるならそいつは正義のヒーローなんぞではない、ただの馬鹿だ。

よって、導きだされる結論はここにいる民警たちは任務内容のあまりにも多いブラックボックスに危機を、違和感を感じているということだ。伊達に命を張ってるわけではないらしい。しかし、そんな事が出来るだけでこの任務を任せるにはまだ足りない。

「質問よろしいでしょうか」

凜とした声が会議室に響く。先ほど、将監に絡まれていた少女である。

『あなたは？』

聖天子が少女の質問に質問で答える。この会議に呼んどいてそれはないだろうとは思うが、偉い人補正がかかっているようなので、望は気にしない。気にしないったら気にしない。

「天童民間警備会社社長、天童木更と申します」

この時、望は驚きを隠せなかった。ローブを着ていなかったら、奇異の視線を向けられること請け合いな程度には。

(まさか、こんなところで『天童』の名を聞くなんてな)

天童家。武術に優れた流派であり、政界にも莫大な財力を使って進出している所謂名家だ。何を隠そう聖天子の隣に立っている老人の名は天童菊之丞。名だたる天童家の一人である。

あの木更という少女が天童ならば、プロモーターのあの少年も天童の息がかかっているといい。望は天童木更の後ろに立つ少年を興味深く見つめ、先刻の言葉を反芻する。

(延珠を道具だと、か)

延珠とはイニシエーターの名前だろう。イニシエーター、いや呪われた子どもたちのことを彼は少なくとも悪いイメージを持っていない。ならば、天童を知っているあの少

年は呪われた子供たちをどう思っているのだろうか。あの少年とはいつか話して見たいと望は密かに思う。望の思考の間にも二人の美女の会話は進む。

『質問とは何でしょうか、天童社長』

「そのケースの中には何が入っているのでしょうか？」

『……クライアントのプライベートがありますのでお答えできません』

室内が少しざわつく。無理もないことだ。中身の教えられない物を取り返して来い？しかも、国からの依頼？胡散臭いと感じるのとはとても容易である。民警側としてはせめて、どれぐらい危険なのかは知りたいところだ。

それを物怖じしないで訊くことのできた木更を望は高く評価する。伊達に若くしてここに呼ばれていない、と。面白いことに木更は質問を続けた。

「感染源のモデルスパイダー。それならば、この場にいる民警トップクラスの御歴々に依頼する必要性はないと思います。しかも、このような破格の報酬。それに見合うような危険がケースの中身にある……もしくは、他に狙う組織があるのでありませんか？」

『……あなたが知る必要のないことです』

聖天子は暗にそれ以上の質問を許さないと言った。あまりにも横暴な物言い、会議室は静寂に包まれた。

「フハハハハハハハッ」

だから、とても愉快なことが起こっていると云わんばかりの笑い声はよく響いた。

『……何者ですか?』

「私だ」

「お前はっ?!」

木更の後ろで立っていた少年が乗り出すように叫ぶ。その先には口が裂けた仮面、シルクハットを被り、趣味の悪い真つ赤な燕尾服を着た道化が空席のだったはずのイスに腰掛けていた。道化は身体を反らしながら、机の上に登り、シルクハットを取りながら演技じみた礼をする。

「私は蛭子、蛭子影胤と言う。お初にお目にかかるねえ、無能な国家元首殿」

聖天子は静かに影胤を睨みつける。しかし、影胤は愉快に笑い、それだけで民警たちに警戒心を鋭く走らせる。その筆頭であつた少年が銃を構える。

「元氣だつたかい、里見くん?」

「てめえ、どこから入ってきた?!」

「無論、正面から堂々とだよ。まあ、来る途中で襲いかかつてきたゴミくずみたいのは掃除させてもらったけどね」

いちいち芝居がかった手振り身振りをする影胤は非常に気に障るが、一切の隙もな

い。影胤と対峙する里見と呼ばれた少年のXD拳銃を持つ手に力が入る。一応、望も動けるように体制を整える。

「そうだ、我が娘を紹介しよう。おいで小比奈」

「はい、パパ」

小比奈と呼ばれたフリルがあしらわれた黒いワンピースにウェーブのかかった髪の毛がやや手こずりながらも机に登り、スカートをつまみながらうやうやしく頭をさげる。自分の後ろから気配なく現れた少女に里見は驚いていた。

「蛭子小比奈、10歳」

「私のイニシエーターにして、娘だ」

「パパ、あいつ鉄砲こっちに向けてるよ？斬っていい？」

「よしよし、まだダメだ。我が娘よ、我慢なさい」

とんでもない子が出てきたなと望は思わざるを得なかった。何せ、10歳と名乗ったあどけない少女の背中には真紅の液体がべつとりと付いた二振りの小太刀が背負われていたのだから。そんな少女を目にした里見たちは恐怖心を掻き立てられ、さらに警戒心を強めていた。

「何の用だ?!」

「私もこのレースにエントリーしようと思ってね。それを伝えに来たんだ。そして、私

たちがこのレースに勝ち、七星の遺産をいただくとも言っておこう」

「七星の遺産？」

「おやあ、知らされてないようだね、里見くん」

おやおや、これはフェアでにならないなあ、と顔を手で覆いながら影胤は嫌味たっぷりに笑う。

「君達が探すことになっていたアタツシユケースの中身だよ。さあ、諸君ルールの確認をしようじゃないか。どちらが七星の遺産を手に入れるかの勝負。もちろん、妨害、略奪もアリだ。賭け金は君達の命でいかが？」

楽しそうに巫山戯たことを提案する影胤。しかし、彼の前でそのような巫山戯た真似は許されなかった。

「グダグダうつせえんだよ!!」

将監がバスターソードを携え襲いかかる。大柄な身体に似合わず、スピードは序列に恥じぬスピードであった。しかし逆にいうと序列に見合ったスピードでしかなかった。

「ヒヒッ、残念」

将監のバスターソードは影胤に届くことなく見えない壁に阻まれ、簡単に弾かれる。

「なっ!!」

「下がれ、将監!!」



将監が影胤と距離をとったことを確認するや否や、一切に撃ち出されるバラニウム弾。しかし、将監のバスターソードと同じく、見えない壁に阻まれ、影胤の周囲に浮いていた。その中心に存在する影胤は楽しそうに殺気を放っていた。

「バリアー!!」

「斥力フィールド。私は『イマジナリーギミック』と呼んでいる」

「あんた、本当に人間なのか？」

「もちろん、私は列記とした人間だ。しかし、少しばかり身体を弄ってはいるがね。さて、この銃弾のお返しをしようか。無論、礼はいらないよ」

「伏せろっ!!!」

影胤が何をするか察した里見が叫ぶ。しかしほとんどの者が間に合わず、影胤の周囲に浮いていた銃弾の猛威にさらされた。

「ねえパパ。まだ生きてるのいる、斬っていい？」

小比奈のいうように里見や彼に守られた天童は無傷だった。他にも致命傷をまぬがれた者もいたが、今、この場合は影胤の圧倒的優勢の状況である。しかし、影胤が彼らに止めを刺すことはなかった。

「ダメだよ、小比奈。私は眠れる虎の尾を踏みたくないからね。今は我慢しなさい」

「トラ？ パパ、ここにトラいるの？」

「……そういう意味ではないよ、小比奈」

小比奈の頭にはクエスチョンマークが浮かんでいたが、それに影胤は答える事なく部屋の隅を睨みつけていた。

つまり、望のいる部屋の隅を睨みつけていた。

影胤はひとしきり望と睨み合い、望が自分の邪魔をする気がないのを確認するとシルクハットをかぶり直す。

「今日はこの辺で失礼しよう。そうだ里見くん、これは私からのほんの気持ちだ。受け取ってくれたまえ」

影胤は自分の手に白いハンカチをかぶせ、そこから手品のようにリボンで飾られた箱を取り出した。

「では、失礼するよ」

箱を机の上に置き、聖天子と里見に白々しく頭をたれる。そして、ごく自然に窓の外へと小比奈とともに飛び立った。

嵐が過ぎ去ったかのような静寂。いち早く回復した聖天子が口を開いた。

『先ほどの依頼の内容に追加します。あの男より早くケースを奪還し、保護してください。ケースの中には『七星の遺産』、この東京エリアに未曾有の大災害を起こす封印指定物がはいっています』

プレゼントの中から静かに真つ赤な液体が滴る。

民警たちが病院に搬送されたり、任務のために勢いよく飛び出していったあと、望は会議室とは違う部屋に通された。そして向かいのパネルには聖天子が映っている。

『まさか、あの様な邪魔が入ることになるなんて』

聖天子が会議室では見せなかつた焦りを見せる。

「当然だろ。無能な国家元首殿」

影胤と同じ呼び方をした望を聖天子は睨みつける。ちなみに望はこの呼び方を気に入っている。

「そもそも、七星の遺産の運送中にガストレアに襲われたっていう話の時点できな臭いだろ。影胤は運送について知っていた奴の差し金と考えていい」

その誰かは知らないけど、と望は興味がなさそうに付け加える。

顎に手を当て、難しい顔をした聖天子は少し考える。

『黒幕のほうは私に任せて下さい。望さん……遺産は取り返せそうですか？』

「蛭子さえいなければ、問題ないと言いたるところだったんだがなあ」

『蛭子影胤、小比奈ペア。元IP民警序列134位。数多くの殺人を犯し、民警ライセンスを剥奪され、序列も凍結中……』

「んで、新人類創造計画の機械化兵士か……」

望は黒服のお兄さんから渡された資料をペラペラとめくる。

『今回、依頼した中に100番代の民警はいないので』

「多分、無理だな。里見少年がかりうじて互角といったところだ」

『……里見さんだけです。では、約束通りに望さん、約束通り依頼受けていただけますね?』

聖天子がいつになく神妙な顔で頼む。しかし望の答えはNOだ。ただし、以前とは違う意味合いでNOと答える。

「悪い、今は答えられない。これは……もしも影胤がやらなくてもいつかは俺がやっていたことだ。やり方はもう少し違うかもしれないけれど」

『……それは一体どういう意味で仰ってるのですか?』

いきなりの反乱宣言に取り乱しそうになる聖天子。しかし、望は気にせず淡々と語る。

「俺はこの世界の在り方が気に食わない。希が認められない世界なんて糞食らえだ。だから、もし影胤が赤目の子どもたち……いや、呪われた子どもたちのためにこの東京エリアを滅ぼすのならば、俺はそれを止めることができな」

望の生きる意味。それは常に希のため。希のためならば国の一つや二つ壊しても構

わかない。そのために望は強くなった。“あの時”の約束を忘れた事はない。聖天子は俯いたりしないものの、瞳は悲しみをたたえていた。

『やはり、そうですね。薄々、気付いてはいましたが、あなたは『動く』人なんですね……』  
「ああ、誰かみたいに『いつか叶うかもしれない』理想を語るだけじゃ俺は終われないんでね」

望は真つ向から聖天子の何かを願う瞳に立ち向かう。

「だから、時間が欲しい。蛭子の真意を確かめる」

望は短く伝えると部屋のドアを開ける。その言葉を聞いた聖天子は半ば諦めていた顔に光を宿し、いつもの彼女らしからぬ嬉しそうな声で言う。

『はい、お待ちしています』

望は甘いなと自分に思いつつ、部屋を後にした。

## 第三話

「やっと見つけた」

望はあの会議のあと、丸一日使つて街中を文字通り駆け巡り、影胤を探していた。

そして通りかかった路地裏でついに望は見覚えのあるフリルのついたドレスの少女と赤髪のツインテールの少女が激しくぶつかり合うのを見つけ出した。望は素早く状況を把握し、二人が再度激突するタイミングを見計らい乱入した。

「!!」

「誰じゃ!!」

望は二本の小太刀をナイフで弾き、空いている手でもう一人の少女の足を受け止め、体勢を崩す。当然、少女たちは突然の乱入者に驚いていた。

「探しましたよ、蛭子さん」

「あんたはっ!」

「これはこれは……この間の黒づくめ君じゃないか」

両者の調度中間に降り立つ黒いローブを纏った望。蓮太郎は突然の乱入者に驚いていたが、影胤は蓮太郎とは違い動揺してゐるようには見えなかった。しかしいきなり乱入

してきて勝負の邪魔をし、その上悠長に話している望を待つてやるほど小比奈は寛大でも冷静でもなかった。

「邪魔するなああああ」

単調だが人間には出せないスピードで迫る小比奈。それに望は二振りのナイフで応戦する。望の姿にはまだかなり余裕があるようにみえた。

「なんで斬れないの!!」

まるで自分の得物が誘導されているように小比奈は感じていた。怒りを露わにする小比奈の小太刀は望のロープの端にすら引つかからず、一太刀残らずナイフに止められている。

「小比奈、よけなさい」

小比奈が大きく跳躍し、望との距離を取ると影胤が2丁のピストルを構え、望目掛けて連射する。その銃撃を望は右や左にステップし、ロープをたなびかせながら軽く躲した。

「パパ、あいつ強い」

「やはり虎だったようだね」

とりあえず小比奈の猛攻が止み、この空間に短い小休止が生まれた。その数秒でようやくこの状況に追いついていなかった二人が再起動する。

「れ、蓮太郎、あの者は敵か?」

「わかんねえ。今のところ敵ではなさそうだな」

蓮太郎はX D拳銃を構え、延珠もいつでもかかってこいと言わんばかりに構えた。いまや、この空間は一触即発の三竦み状態になっている。

しばしの沈黙。こういう場にあまり慣れていない蓮太郎と延珠にはこの沈黙が数分に感じられた。そして、硬直状態を解いたのは言うまでもなく、乱入者として立つ望だった。望は両手を上げ、戦う意思がないことを兩人に伝える。

「俺は戦うためにきた訳ではありませんよ。ただ、話をしにきただけです」

「ふむ、ならば顔ぐらい見せてはどうかね」

影胤が望に銃口を向ける。

「……すみませんがこのままで。顔見て話すの苦手なんですよ。……それにあなたも似た様なものでしょう?」

「確かにそうだった。これは一本取られたよ、ヒヒツ」

この様な修羅場でも笑っている影胤。蓮太郎には気が狂っているようにしか見えなかった。だが、それよりも恐ろしく、奇妙な存在が目の前にいる。それから発せられるオーラは一瞬の気の緩みも許されないと蓮太郎は無理矢理に感じさせられる。

「あんたは誰なんだ?!!」



「名乗るほどの者じゃない、気にするな里見蓮太郎」

「一度クールダウンしようじゃないか里見くん、とりあえず武器を収めるとしよう」

影胤の提案に蓮太郎も大人しく従う。実際のところ、一番渋っていたのは小比奈だった。  
たが。

「で、私に話とは何かね？これでも追われている身でね、ヒヒツ」

「あなたの真意を聞きにきました」

「ふむ、真意とな。それは件のレースのことかね？」

「はい。蛭子さん、あなたは何故東京エリアを滅ぼすのですか？」

蓮太郎の身体全身に緊張が走る。蓮太郎にはこのロープが何に對して質問しているのかわからなかった。さも、答えによっては許すと言っているように聞こえたからだ。拳銃を仕舞ったもののすぐに抜き出せる様に手を掛ける。

「何故？そんなもの決まっている。私は機械化兵士だ。今のような腑抜けた世界では私は自分の存在意義を見出せない。だからこそ、再び世界に混沌を呼び戻し、元のような刺激ある世界にするのだよ!!私も君も里見くんも戦いの中でしか自分の存在意義を見つけれないからね!!」

影胤は酔ったように真意を語る。蓮太郎は影胤を改めて危険人物だと認識する。

「だから里見くん、私と来ないかい？」

「断る!!」

「いやはや、またふられてしまったよ。しかし、君の方はいかがかな？悪い話ではないと思うがね」

「残念ですが、俺とは考え方が違うようです。俺の夢見る世界は戦乱の世じゃない」

「……それは残念だ。じゃあ、小比奈あの黒ずくめと里見くんを殺してしまいなさい」

「はい、パパ」

小比奈は命令通りに二振りの小太刀で望の首を狙う。しかし、小太刀は宙を斬り、小比奈は目標を見失う。

「どい!」

小比奈の視界から消えた望は小比奈の背後に一瞬の内にまわり、質問には答えずに小比奈の右腕を掴む。そして、そのまま影胤に向かって投げつけた。小比奈は空中で体制を整え、望を忌々しい物を見るように睨みつける。

「蛭子影胤、今ここで俺に倒されるか逃げて小さな希望にすぎるか、どっちにする?」

先程までの物腰の柔らかい喋り方や雰囲気は消え、この状況をどこか楽しんでいるかのように望は影胤に選択を迫る。

「……忠告痛みいるよ。君には勝てそうにないからね。では、里見くんまた会おう。黒ずくめ君、君には出来ればもう会いたくないがね。小比奈、引き上げだ」

「……」

小比奈は殺意に満ちた目で望をにらみながらも影胤の後をついていった。それを見送った望も一息つき、家路につこうと歩き出す。

「おい、待てよ」

蓮太郎は望の背中に照準を合わせる。だが、銃を持つ手は震えていた。

「あんた、一体何者なんだ？ 本当に俺たちの味方なのか？」

「……ベタだけど、敵だと言ったら？」

「撃つ」

「そうか……なあ、里見。お前の望み、希望、夢見る世界はどんなだ？」

「望み？ そ、それは……」

蓮太郎は訊かれた質問があまりにも唐突だったためすぐに答えられなかった。

「まだ、決まってるのならばそれでいいさ。お返しにお前の質問に答えよう」

望は蓮太郎の答えを待つことなく、銃を向けられることを気にせずに再び歩き始めた。

「そう遠くない未来の敵だ。だから、今はまだ名乗るには早い」

「待てっ!!」

望はそう言い残すと都会の闇に消え、蓮太郎の声だけが反響する。

「蓮太郎、あやつ蓮太郎の名を知っていたぞ。小比奈というイニシエーターも強かったが、あの真つ黒、その上をはるかに超えておる」

「くそつ。わけわかんねえ、これから一体どうなつちまうんだよ……」

蓮太郎は自分の無力や無知に打ち拉がれるほかなかつた。

蓮太郎や影胤と別れた望は路地裏で一本の電話をかけていた。

「聖天子、望だ」

「望さん、どうしましたか？」

「依頼を受諾する」

聖天子は息を飲み、自分でもはつきりと分かるぐらい安堵する。望が依頼を受けてくれるということはすなわち、東京エリアの壊滅はよつぼどの事がない限り免れたと言つても過言ではないのと、最悪にして最強の敵が生まれなかつたということに他ならない。汚い話ではあるが、望が気が変わらないうちに報酬の話を終わらせようと聖天子は言葉を紡ぐ。

「ありがとうございます。報酬の方は如何しますか？」

「前金で250万。ケースをあんたの所まで持つて行って250万。他の奴が持つて行った場合は前金だけでいい」

確か成功報酬はかなりの破格だったはずだと望は思い返す。

「会社には伝えた方がいいですか？」

「そうだな。最近、勝手にやり過ぎて春香さんに怒られたから、そうしてくれ」

「了解しました。……一つお聞きしても？」

「俺が答えられるなら構わない」

聖天子はあまりにも短い業務連絡のような電話では少し物足りないと感じ、望の数多くの疑問のうち、最も聞いてみたい疑問を投げ掛ける。

「何故この様な報酬にしたのですか？望さんなら一括で問題ないと思いますが？失敗することもないでしょう？」

「ん？そりゃ一日待ってもらったお詫びで減額したのと確実に報酬をもらうためだ。今回のルールはバトルロイヤルだからな。守銭奴とか言うなよ？希もお年頃の女の子だからな。これから何かと入りようなんだよ。中学の準備もしくちゃんねえし」

「……考え方が本物の親御さんみたいです。それにあなたの中心が希さんだということがよく分かります。ちよつと羨ましいですね……」

「は？お前の方がよっぽどちゃやされてんだろ」

「私だつて一人の人間です。ただ自分のためだけに誰かが尽くしてくれる事はとても羨ましく思えます。私の周りには私利私欲のためだけに動く人たちがばかりですから」

「偉い奴なりに大変なことがあるってやつか。これだから人間は……」

ただでさえ人間嫌いの望がさらに人間に対して嫌悪感を抱いていると聖天子がそう  
だ、と何かをひらめく。

「また希さんも連れてお茶でもしませんか？」

「断る。何を言うかと思つたら……お前のとこだと落ち着かない。それに紅茶なら希が  
入れたのが一番だ」

「では、私が望さんの御宅に伺いますね」

「何で会うことは決定してる方向で話進んでんの？俺、断つたよね？」

「冗談ですよ。私にそんな暇ありませんから。多忙な自分が恨めしいです」

「暇だつたら来るつもりだったのかよ……」

望は相変わらず聖天子にペースを崩されっぱなしだった。距離感は遠いはずなのに  
どんどん近寄つて来る、そんな感じ。望には希とまた違った妹の様な存在みたいに感じ  
ている。今もイタズラが成功して、クスクス笑っている声が電話越しに聴こえてくる。

聖天子という立場、それにあれだけ綺麗だと言い寄る男も無数にいるのだろう。それ  
でストレスがたまり、気楽に話せるが相手が欲しかったのだろうと望は勝手に結論づけ  
た。ストレスの捌け口にされた望はたまつたもんじやないが。いつの日か皇居に行つ  
た時、この仕返しはさせて貰おう。……きつと無いなそんなチャンス。

「もう質問は受け付けん。これ以上、ストレスの捌け口にされるのは御免だ」

「お話に付き合わせてしまつてすみません」

「お前、悪いと思つてないよな……まあ、いい」

聖天子のあまりにも明るい謝罪に流石の望もこれにはうんざりしてしまつた。本当にこの人、国家元首様なんですかね。

「あ」

望は言い忘れていたことを思い出した。

「聖天子、いつも通り序列の固定と俺たちについて、*“全て”*の情報の消去頼んだ」

「承りました」

聖天子が二つ返事で了承する。そして、これも言い忘れたことの一つ。これは常に直接依頼人から依頼を受諾した時言うことにしている。所謂決め台詞のようなものだ。そのせいで都市伝説なんて噂されるようになってしまったのは誤算だったが。

「では、完璧の答えをお待ちください」

## 第四話

「ただいま」

玄関からドアの開く音がし、希の声がした。希が小学校から帰ってきたのだ。望は勉学で疲れているであろう希を全力で迎える。そう、いつも通りに。

「のっぞみー!!待ってたよー!!愛してるうううう」

希に抱きつこうとする望。望の普段の人の悪い顔は何処へやら、最高の笑顔でせまってくる。しかし希はウザい父親をあしらうかのように華麗によけた。

「ぶべっ」

案の定、望は壁に激突。それはもうコントのように勢いよく。希は崩れ落ちた望を見て、自分の居場所に帰ってきたんだと改めて思う。希が帰ってくるたびにこのような茶番が行われるのだが、希はバカみたいに平和な日常のこの一コマが好きだった。

「兄さん、ただいま」

「おかえり、希」

希が笑い、望も笑顔になる。これだけで、たったこれだけで二人はホッとする。心が



安らぐ。幸せだと感じる。

「お仕事の方はいいの？」

「まだ連絡きてないから、自宅待機だな。でも、春香さん今日中に見つけ出すって言つてたからもうそろそろのはず」

「やっぱり私も行つた方がいい？」

「明日も学校だろ？別にたいした任務じゃないし、気にすんな」

「そつか……必要ないか」

どことなく残念そうな顔をする希。別に要らないと言われた訳ではないが、必要とされたかと思つてしまうのが乙女心。自分のために言つてくれていることは希も重々理解しているけれども、不機嫌さを隠すことが出来る程、希は大人ではない。乙女心とはどうしたつて理不尽なものである。

一方、望はどうしたものかと首をひねつていた。希が不機嫌そうにしているのを察したが、何にたいして不満なのか理解出来ない。

「えつと、今日はいつしよに飯は食えないと思う……多分。今日中に帰つて来れるかも怪しいし。だから、俺の分は要らないから」

とりあえず、望は思いつくだけの懸念事項を並べてみる。だが、一向に希の不機嫌は治らない。まあ、全くの検討はずれなので治るはずもないのだが。

そもそも今回の任務はイレギュラーなのだ。東京エリアが壊滅する可能性があるから今回は仕方なく依頼を受けた。平常ならば土日祝日、つまり希の休日には任務をすることはほとんどない。

それも賢い希なら言うまでもなく理解してくれていると思っていたのだが、どうやら違うらしい。望がどうかして希の機嫌を取ろうと考えているとある事を閃いた。

「……ね、寝るとき寂しくないか？」

「兄さん、私のこと一体何歳だと思ってるんですか？」

「いや、あのですね。別に子ども扱いしてる訳では……兄としては『お兄ちゃん寝るっ!!』と言ってくれた方が嬉しいんですけど」

「そんな妹は千葉にもいないよ、兄さん。とりあえず、気持ち悪いから二度とそういうことと言わないでね」

さらりと毒を吐く希。しかも目元しか笑ってない。久々にご立腹の希さん。年頃の子のやはり気難しいものだ。と世のお父さんの気持ちが少し分かった望であった。

そんな感慨にひたっていると携帯が振動し、液晶パネルに「哀川春香」と映し出される。

春香は哀川民間警備会社の社長の娘で、訳ありの望を拾ってくれた恩人である。理由

を知らない者から見たら望は怠惰の限りを尽くす怠け者のため、会社に所属したばかりの頃は他のプロモーターたちと軋轢を産んでしまったりと人間関係で多々問題があったのだが、全て春香に仲介してもらい、事を収めてもらっている。

だから望は二度、命を救われていると思っっている。そのため望にとつて春香は希の次に頭が上がらない相手でもある。手をかけてもらっている分、無理難題の任務をまわされることもあるが、恩返しだと思っつて完璧にこなしている。そこは望もギブアンドテイクだと割り切っていた。

「はい、夢見です」

「望くん？ やつとあのクモ見つけたわ！ 木更ちゃんのところにも一歩遅れてるから急いで行くわよ。今すぐ迎えに行くから準備しておいて!!」

春香は望の返事を聞かずに通話を切る。きつと次から次へと引つ切り無しにプロモーターへと電話をかけていることだろう。春香はとてもパワフルな女性であり、望の同い年ながら会社の人事を任されるほど人を扱うのが上手く、人柄、容姿ともに魅力的な人だ。社内でも惹かれてる者も少ないないと聞いた事がある。でも、父親もとい社長が色んな意味で怖いんですよ、ほんとに。

そして、最近自分の扱いが親子共々少し雑になつてきている気がするのと望はひそかに思っているのだが、口にする事は未来永劫ないだろう。

「兄さん、こつちでいいですか？」

人知れず溜息をついてるとパタパタと階段を降りてきた希に真つ白いコートと目と鼻を隠す仮面を手渡される。

ありがとう、とコートと仮面を受け取るといつもと変わら

ない重みが腕にかかる。今までもこれからも刈り取るであろう命の重みがこのコートには染み付いている。今更、誰かから命を奪い取ることにためらいなんぞ微塵にも感じないが、自分が生きてる限り決して忘れてはならないのだらうと臆げながら望は理解していた。

ガバメントが入っているホルスター付きジャケットを着て、その上からコートを広げて羽織ると金属同士がぶつかり合う音がする。このコートにも動きを妨げないギリギリまで武器が仕込まれているのだ。脚用のホルスターにM A C I Iを両脚に1丁ずつ入れ、安全靴を履く。望が靴を履いたのを確認すると希は仮面を手渡す。

「キヤラ被つてんだよなあ」

望は影胤を思い浮かべながら、仮面以外で顔を隠せる物を新しく考えるべきかどうか思案する。そして、しっかりと仮面を付けた。この姿はプロモーターとして仕事をする時の望のコスチュームだ。ちなみに「完璧の答」の時はこれとはまた違うコスチュームを使う。

「行くわよ望くん!!」

準備が完了し玄関のドアを開けるとタイミングよく、輸送へりに乗った春香が現れる。あのへりの中には他のプロモーターたちも乗っているようだ。望はいきなりのお出迎えに驚くと同時にこの短時間で輸送へりを手配する春香の手際の良さに感心してしまった。しかし、望の耳はその言葉を一つとして聴き逃すことはない。

「いつてらっしやい、兄さん!!」

すぐ近くにへりコプターが爆音を発しているというのに、望は希の声をしっかりと聴き取ることができる。“あの時”望は決意した。例えばどんなにこの手を汚そうと希だけは絶対に守ると。約束は決意に。決意は想いに。想いは絶対に揺らぐことのない覚悟に。

望は希にしか見せない一切の裏表を感じさせない笑顔をする。

「いつてきます」

望が後ろ手に閉めたドアは静かに閉められた。そこに残された希が呟く。

「希は無事のお帰りをお待ちしています」

自分の女神の願いを叶えるべく望は輸送へりに乗り込んだ。

## 第五話

望の乗ったヘリはターゲットのガストレアが発見された森に向かって上空を飛んでいた。春香の話では今回のターゲットは独自に進化したガストレアらしく、クモのくせに飛ぶらしい。

おそらく、先に向かっている里見・藍原ペアはもう交戦しているはずであり、あの二人ならば特に苦戦することなくガストレアは倒してしまうだろうとも望は話から予測していた。

だがしかし、問題はここからである。

蛭子影胤。こいつが介入してくることはほぼ間違いない。しかし、今の蓮太郎では荷が重い相手だ。

望としては蓮太郎が影胤にやられてしまう前になんとしても合流したいところだ。そうじゃないとお荷物を背負って戦うことになる。

望が最悪の場合になった時のプランを頭の中で組み立てていると、大きな爆発音がした。

「爆発っ!! みんなっ、準備して!!」

春香さんが操縦士に高度を下げるように指示を出す。望以外のコンビが降下用パラシュートを用意し始める。そんな中望は一人、ヘリの扉を開ける。

「さささ、先に行きましゅ……」

「え!!!!!! から!! 流石のあなたでも死ぬわよ!!」

春香の声が聴こえた時にはもう望は降下、否、落下していた。ちなみに返事を聞かずに飛びしたのは囁んでしまった照れ隠しだったりする。

上空何百メートルで悶絶する望。しかし、事態は切迫している。巫山戯ている暇はないのだ。まさかこうも簡単に影胤に見つかるとは里見の普段の行いはあまり良くないようだ。

イケメンさまあメシウマメシウマ（ゲス顔）

「思ったより蛭子影胤の動きが早い」

コートから取り出したナイフを一本の大樹に向かって投げる。投げられたナイフは大樹に深く突き刺さり、望はナイフに接続されたワイヤーを空中ブランコのように操り、もう一度自身を空中に放り出す。空中で衝撃を出来る限り小さくできる体勢をと、砂煙を巻き上げながら着地した。

「久しぶりだな、このとんでもアクロバティック着地」

独り言を呟いたのも束の間、爆発音がした位置を確認する。適当に落ちてきたわりにはもう目と鼻の先だった。しかし、望が進もうとする道にピョンピョンとウサギのように跳ねる影を見つける。

「結構、速いな……影胤、いや小比奈か？」

敵、もしくは新手のガストレアだと望は判断し、木から引き抜いたナイフを逆手持ちで構え警戒する。しかし、影は減速することなく望に突撃した。

ガストレアですらしなないであろう予想を越えた攻撃に望は完璧に不意をつかれた。すぐさまこいつを引き剥がし距離とらなければと、すぐに立ち上がるが、真紅の瞳から涙を零す少女に抱きつかれていたことに気付く。

「頼むっ！助けてくれっ、このままでは蓮太郎っ、蓮太郎がっ！」

影の正体は藍原延珠。里見蓮太郎のインシエーターだった。この取り乱しようはおそらく蓮太郎が影胤に手酷くやられたに違いない。予想された最悪の事態。

ならば、急ぐべきか。迷ってる暇は無い。

「分かった。道案内してくれ」

「あっちだ！」

「しっかり捕まってるよ」

望は延珠をお姫様抱っこしながら指差された方向へと超高速で走り出した。



「は、速っ!!」

あまりのスピードに延珠は望に振り落とされないようにしがみついた。モデルラビツトの自分ですら出せない速度で走る人間に延珠は驚きを隠せなかった。延珠が数分かけた道をももの数十秒で望は走り抜ける。

そして、影胤の姿を見つめるや否や延珠を片手で抱えながら、拳を叩きつけた。

「パパっ!!」

「チツ、マキシمامペイン!!」

助走で威力が増した望の拳は斥力の壁を破るには至らず、弾かれた。それを弾かれる前に察した望は斥力の壁を足場に大きく跳躍。蓮太郎を庇う位置に降り立ち、延珠を静かに降ろした。

「蓮太郎っ!!」

「…………え…………延珠…………な、んで戻って…………」

「待つてろ蓮太郎。すぐに手当てしてやるからな」

血だらけの蓮太郎が延珠の名を苦しそうに呟く。降ろしてもらった延珠はすぐさま蓮太郎に駆け寄り手を握る。

「パパ、あいつ攻撃してきた。斬って良い?」

「いいよ、小比奈。殺してしまいなさい」

影胤から許しを得ると小比奈は嬉々として望に襲いかかる。小比奈は小太刀を力任せに振るう。

だが、望の売りはイニシエーターよりも段違いに速いスピード。小比奈のように考えなしに大振りをする相手は格好の相手だ。

望は小比奈が小太刀を振るう前に懐に潜り込み、掌底を打ち込む。

「うっ」

望は小比奈を休ませる暇なく頭を強引に掴み、影胤に向かって投げつける。そして、流れるように脚部のホルスターからMAC-11を取り出し、蛭子親子に向かって発射する。

「イマジナリーギミック！」

影胤は小比奈を庇うように斥力フィールドを展開して銃弾から小比奈を守った。

意外にも影胤に小比奈を捨て駒にする気はないらしいと望は判断し、攻略の際に有効なカードになると頭の片隅にとどめておく。

そして、血だらけの蓮太郎を一瞥する。大きなキズは二カ所。どちらも身体を深々と貫かれていた。他にも銃弾に穿たれた傷が何カ所かあった。このままでは失血死の恐れがある。一刻も早く手当てをする必要がある大怪我だ。望はどうにも旗色が悪いことに顔をしかめる。



影胤が言葉を発した瞬間、望がいた直線上は根こそぎになっていた。人間としては規格外な威力を目の当たりにした望は厄介な能力だと、悪態をつく。

「バラバラになっちゃえ」

滞空中の望に小比奈が追い打ちをかける。流石の望でも滞空中では回避行動をとることは難しい。

「チツ」

悪足掻きをするように望はナイフ投げつけるが、小比奈は首を傾げるだけで躲した。どんな強者であろうと人の子であるかぎり、空中ではただの的。

つまり、この追い打ちは影胤の歴戦の経験則も小比奈のイニシエーターとして生まれた生来の戦闘センスも勝利を確信して疑わなかった。実際、2人はこのコンビネーションで幾人もの強敵を屠ってきたのだ。今回も繰り返し同じ事をしただけ。なんら変わりのないルーチンワーク。

しかし、今回は相手が悪かった。

望の身体は先程投げつけたナイフが刺さった大きな木に引つ張られ、小比奈の攻撃を躲す。そして、望が木の枝に着地した直後、木を揺るがすほどの踏み込みで再び空へ舞う。勿論、狙いは小比奈である。

さつきと打って変わって、防戦一方になった小比奈は小太刀を自分の前で交差させ

た。望はナイフを下から振り上げ、ガードを崩し、小比奈の小さな身体目掛けて蹴りをいれる。続けて、両手のナイフを地面に突き刺し、ナイフに繋がっているワイヤーを巻く。落下スピードにワイヤーの戻るスピードをプラスしながら望は落下する。そして、そのまま望は小比奈を思いつきり踏み付ける。

望流ワイヤー式急降下キック。この一撃で小比奈の意識は刈り取られていた。

小さな女の子を容赦無く叩きのめした罪悪感など微塵も感じさせずに望は影胤に相対する。

「随分とアクロバティックな戦い方をするね、君は。まさか小比奈がただの人間にやられるとは思わなかったよ」

「まあ、ただの人間じゃないからな。それにこういう時は「アレ」だよな」

望は小比奈を倒されたことに憤る影胤のことは御構い無しに独り言を呟く。そして、ビシッと効果音が付きそうなくらい影胤を指差す。

「お前たちは一体いつから、俺が空中で動けないと錯覚していた？」

「冗談にしても本当にたちが悪い。私には少しばかり荷が重過ぎる相手だよ、君は!!」

狂乱したのか影胤はベレッタを全く狙いを付けずに乱射する。すると、延珠と倒れる蓮太郎の近くの木々が倒れていく。

(狙いはこっちか、まあそうくるだろうな。俺だったらそうするし)

望は即座に移動し、延珠たちに向かって倒れていく木々を力任せに蹴りつけ、粉々に砕く。

「では、さらばだ。白い悪魔、滅びの時は近い!!」

影胤が小比奈を抱え、アタッシュケースを持って去っていくのが、数々の倒木の奥に見えた。蓮太郎のことを置いて行きたいが、延珠に頼まれた手前それはできない。

「誰がガン〇ムだ、誰が」

負け惜しみの様に呟く望。今回の任務は失敗。久々の敗北である。望はもう過ぎたことだと頭の中から振り切り、蓮太郎の様子を確認する。

「このままだと間違いなく失血死だな。これであつてるのかも知らんし、麻酔もないから我慢しろよ」

望は右腕に集中すると人工皮膚が弾け、真っ黒の腕が現れる。今、望の右腕には5000Vもの高周波の電圧が通っていて、その腕を蓮太郎の傷口に押し付ける。

「ああああああああああああ」

「な、蓮太郎に何をすする!!」

「止血だ。電気メスみたいに傷口を焼いて止血でもしないと病院までもたないぞ、こいつ」

苦しみ暴れる蓮太郎を押さえつけ、淡々と望は荒療治を施す。延珠にはだいぶシヨツ

キングな光景だったが、蓮太郎を助けるためだ。それを察したのか延珠はそつと蓮太郎の手を握っていた。

「とりあえず、血は止まったな。でも、まだ危ないな」

出血が止まったことを確認した望は蓮太郎のポケットを弄り、携帯を取り出し、延珠に投げる。

「お前らの会社の社長に連絡しろ」

「わかった!」

その間に蓮太郎を肩に担ぎ、延珠を抱える。そして、森から出る最短ルートを全速力で走り始める。

「ぎ、木更!! ね、蓮太郎が!」

『その声は延珠ちゃん!! 里見くんがどうしたの!!』

どうやら天童木更と繋がったようだ。望は半ばパニック状態に陥っている延珠にいつか希にもやったように優しく話し掛ける。

「繋がったのならその相手と話させてくれ」

「う、うむ。木更、助けてくれた仮面のヒーローに変わるぞ」

『か、仮面!!』

「天童木更か?」

『……そうですけど、あなたは？』

「すまないが、一秒でも時間が惜しい。今からスタート地点βに救急車を手配してくれ。状況は腹部二カ所貫かれてる。……他にも結構撃たれてるな。今は傷口を焼いて止血してる状態だ。相当出血してるから、失血の恐れもある。一刻も早く治療が必要だ」

延珠に携帯を耳に当ててもらいながら木更に状況を伝える。

『分かりました。すぐに手配します！』

木更はそう言うのと通話を切る。話が早くて何よりだ。

どもったり、囁んだりせずに知らない人と話せたことは望的に本日一番の頑張りだな、帰ったら希に目一杯褒めてもらおうと心に決める。ここ、重要。

蓮太郎について打てるだけの手は打った。あとは蓮太郎の運次第だ。

「えっと……名前、延珠だったか？」

「うむ。妾は藍原延珠、蓮太郎のイニシエーターなのだ。蓮太郎を助けてくれて本当にありがとう」

「藍原延珠、助けた代わりに頼みを聞いて欲しいんだが」

「おぬしは蓮太郎の命の恩人だ。妾に出来ることなら何でも構わないぞ」

な、何でもって……あんなことやそんなことでも良いんですかね（ゲス顔）

冗談はさて置き、望は本題に乗り出す。



「俺の事を誰にも言わないで欲しい。特に……この腕の事は」

黒光りする右腕。これは影胤と同じ、新人類創造計画で産み出された機械化兵士だと言ふ事を意味する。

「うむ、わかった。だが、蓮太郎もおぬしと同じきかいかへーしとやらだぞ。何で隠す必要があるのだ？」

「……俺は機械化兵士ではない、としか言えない。

……口が滑つたなあ。はあ、人助けなんて慣れないことするもんじない。

いらぬ事まで教えてやったんだ。約束守ってくれるよな」  
にやりと獰猛な笑みを見せる望。

それに延珠は無い胸を目一杯張って答えた。

「任せとけ。だが、蓮太郎にどう説明したら良いのだ？」

里見と天童に嗅ぎ回られるのも面倒だな……望は何か良い手がなにか思案する。

「里見にはそのうちまた会えるとだけ言つていてくれ。

あと、守りたいものがあるなら手を抜くな、とも伝えておいてくれ」

「うむ、わかった。蓮太郎が起きたら必ず伝える」

これでざつくりとだが、事後処理は良いだろう。

望は合流地点に指定したβ地点に到着。まだ木更は到着していないようだ。ゆっく

りと蓮太郎を地面に寝かせ、延珠も降ろした。

「さて、俺はこれでお暇させて貰うぞ」

望は片膝をつき、延珠と同じ目線になって告げる。

「また会えるか？」

「……何でそんな事を訊く？」

「おぬしは呪われた子供たちである妾の頼みを嫌な顔しないで聞いてくれた。だから、おぬしは凄く良いやつなのだ」

「良いやつ……ねえ」

望はしみじみとその言葉を呟く。仮面の奥で望が何を考えているのか延珠には分からない。

望としては蓮太郎がどうなろうとどうでも良かった。しかし、延珠に、呪われた子供たちに頼まれたから助けた、それだけだ。

つまり、呪われた子供たちが良かったな、望は延珠にそう思っているのだ。

これは呪われた子供たちが可哀想だから、差別されているからでは無く、純粹に希と同じ目をした女の子に望が弱いだけである。どちらかというところ、望は呪われた子供たちより普通の人間の方を劣等民族だと思っっているまでである。理由は言うまでもないだろう。

故に全て自分の我儘でやったこと。望としては良いやつと言われる理由がないので、あまりピンとこない。だから、この様な曖昧な返事になってしまった。

「お前たちが呪われた子供たちを救いたいと思っただけなら、また会える……かもな」  
「そうか、じゃあきつとまた会えるな!!」

延珠はニコツと笑う。よく分からないが随分と気に入られたものだ。別に特別なことをしている訳でもないのに。

それに、まだ蓮太郎が助かったと決まった訳ではない。けれど、こんな小さな女神がいるのだ。きつと助かるだろう。

「延珠ちゃん!!」

声のする方を見ると木更の乗ったヘリコプターが上空から降下していた。

「さてと、じゃあな藍原延珠。まあ、そのなんだ……里見のことしつかり見守ってやれよ」

「当然だ!また今度なのだ真つ白仮面」

そう言うのと延珠は小さな身体で蓮太郎を背負い、木更に向けて手を振った。

「白い悪魔の次は真つ白仮面かよ……」

望は全身に電気信号を送り、雷のように消えた。

「とんだ道草を食っちゃまった。これは希に癒してもらうに限る」  
この時、望の頬が緩んでいた事は誰も知らない。

## 第六話

月や星が煌々と夜空に煌き、一人行く望の影を綺麗に映し出している。

望は希の寝顔を見るべく、家路を急いでいた。日課ではあるのだが、やはり仕事帰りの殺伐とした感情を潤すには希の幸せそうな寝顔を見るのが一番だ。それ以外知らないまでである。

望ははやる気持ちを抑えつつ、いつも通りの道を歩き、やつのことで家に辿り着いた。

しかし、すぐに家に入ることはしない。希の安らかな寝顔を見るためには万全を期さねば。

まずは深呼吸。そして、なるべく音を立てずに解錠。

「よし、クリア」

静かにドアを開け、自宅に侵入。第二フェーズクリア。

しかし、望はそこで違和感を感じる。

……リビングの電気が着いている。つまり、これは希が起きている事を指していた。

いつもなら寝ているはずなのに。

「あー今日なんか変だったもんな。何か話したいことがあったのかも知れない。

しかし、それはそれ、だ。少し説教だな……ふへへ」

望はだらけきつた口元を正し、いつもの欠陥人間から凜然とした厳格な兄へと気持ちを入れ替える。

「ただいま」

望がリビングに入ると、希が笑顔で迎えてくれた。本当に可愛いなあ、もう。

だがしかし、望の幸せは何の因果が続かなかつた。

「おかえりなさ………い？」

「な、何故に疑問形？」

希の笑顔が固まる。その様子は望の過去の恐怖体験を呼び起こすに十分過ぎた。

いまや、説教しようとしていた望の姿はない。希が一步步迫る毎に望も一步步後退していく。この状態の希を前に説教など恐れ多すぎる。望はたった五秒前の自分をフルボッコにしたい気持ちでいっぱいだった。

「兄さん、分かりますよね？」

「な、一体何のことでしょう？」

あいかかわらずゆっくりと一歩ずつ迫ってくる希。それと対照的に綺麗に整った顔

のパーツは一つとして動かない。

「あらあら、自覚ないと言うのですか？なら、言つて差し上げるしかないですね」  
にっこりと口元しか笑つてない笑顔を希は作つた。

「お座りなさい」

「あ、はい」

即答。

あまりの重圧に正座しているのが不思議に感じないレベル。ナニコレ、うちの妹怖すぎるんですけど。あと、超恐い。

「さて兄さん、言い訳はありますか？」

「ははは、一体何を言えば良いのやら……」

引きつった笑いしか出来ない。今、機嫌を損ねたら確実に終わる。何が終わるかわからないけど！

望が戦々恐々としてしていると希がコートの匂いを嗅ぎ始めた。

「何をしていらつしやるのでせうか……？」

「この匂い知らないオンナのですね」

希は望の質問を無視し、淡々と続ける。

「身長はあまり高くない……いや、むしろ子供。私と同じぐらい……髪は結構長め。し

かも、匂いが結構濃いですね。血の匂いも付いているのにあまり紛れてない……どれだ  
けくつついていたのでしょうか……首のあたりからもすると抱き合つてたみた  
いですね。可笑しいですね？お仕事に行つていたはずなのに、どうして春香さんとも違  
うオナナの匂いがあるのでしょうか？兄さん、答えてくれますよね？」

細かつ！確かにヤンデレの気はあつたけれども、けれども！こんなに酷かつただろ  
うか。

俺の妹がこんなにヤンデレなわけがない！

……そうじゃなくて、女の子となんてくつつ付いたつけ？小比奈か？いや、髪長くない  
し……天童木更は髪長いけど、論外だろ。血は里見のだし。

望は会つた人間を順にリストアップしていく。そして、蓮太郎のことを思い出したと  
きにある考えに辿り着いた。

「あ。藍原延珠だ」

そして、遅いながらも口を滑らした事に気付く。

「へえ。コミュニケーション障害のクズ兄さんが女の子の名前を聞いてくるなんて、珍  
しいこともあるんですね」

当然、聞き逃さなかつた希が名前に鋭く反応する。それとちよくちよくデイスるのや  
めてください。さらに悲しくなるんで……



「いや、これは止むに止まれぬ状況だったから、たまたま、本当にたまたま聞いただけで、  
なにも他意は無いんです、はい」

「やましい事がないのなら、隠す必要なんて無いですよね？何ですぐに言わなかったんですか？やましいところがあるからじゃないんですか？」

「抱えて走ってたから、あんまり抱き合ってたってイメージがなくて思いつかなかった  
だけです……」

「ふうん、本当に何もなかったと」

「ええ、何もありませんとも。私めは希様一筋ですとも……」

「ひとまず、今日あったこと洗いざらい吐いてくださいね」

俺の妹はヤンデレですか？

違う事を切に願ってます……

まあ、ヤンデレだとしても目に入れても痛くないんですけどね（ドヤ顔）

とりあえず、今日起きたことを包み隠さず紅茶を飲みながら希に話し、希は落ち着きを  
を取り戻していた。

「でも、随分と懐かれたみたいですけどね！」

「それは俺にもさっぱりだ。もしや、女の子の好感度が何をしても上がり、人生の最高潮と言われるあのMO☆TE☆KIかつ!？」

「それはないから、間違いなく。まあ、理由は分かるから良いけど」

「そんな全否定しなくてもいいんじゃない希ちゃん……」

望のことを完全に無視して、希は顎に手を当てて考え込んでいた。それも束の間。希は望の隣りに腰掛け、肩にもたれ掛かった。

「まあ、兄さんが浮気なんて出来るわけないもんね。私はちゃんと分かってたし」

「浮気って……それに希ちゃんさっきのは完璧におこだったでしょ」

「……何か言いましたか？」

「いえ、滅相ありません」

望は目のハイライトが消えている妹にビビりながら、紅茶を啜る。返事に気を良くしたのか、希は望の腕に抱きつく。さながら、望に付けられた匂いを上書きするようだった。

「そういえば希、何か話したいことないか？」

「話したい事？」

望はマグカップを置き、希を抱っこして胡座をかいた足の中に座らせる。所謂、あすなる抱きだ。本題に辿り着くまでの道のりが遠かった。ホントに遠かったよ……

しかし、希は何の事か分からないという顔していた。

「ん？別にないよ？兄さんとお話はしたいけど、特に“これ”ってのはないかな」

「……たまには兄ちゃんに甘えてあげてもいいんじゃないかなあ？」

「ふふ、じゃあいつぱい甘えてあげる」

希は望に身体を預け、望は希の小さく柔らかな身体をしつかりと抱きしめる。

他の誰かがこの場にいたら、兄妹にしてはスキンシップが過度ではないのかと言いたくなるような光景だ。

だが、望はそれに対して声を大にして言う事が出来る。

妹相手にベタバタイチャイチャして何がわるい。寧ろ、これが異常だと思ってしまうお前たちの方が妹を異性と見ているのではないのか、と。

全くもって呆れたシスコン振りではあるが、この家には生憎咎める者はいない。二人の両親すら、もうこの世にはいない。望と希にとつての家族はお互いに二人だけである。

兄妹だけの静かで安らかな時間がゆっくりと流れる。望が希の頭を撫でようとするが、自分の右腕の状態を見て留まる。

「そういえば兄さん、使ったんだね」

「まあ、使ったのは戦闘じゃないけどな」

望は自分の黒光りする右腕を見下ろす。ひ弱な望を最強と言わず、能力の一端がこのバラニウム合金製の両腕だ。この腕には電気が溜まったカートリッジを装填できる機構があり、望はそのカートリッジに溜まっている電気を自由自在に扱うことができる。主な使い方は自分の神経に電気信号を送り、超高速戦闘を行なえるようにしたり、蓮太郎のケガの止血をした時のように腕に帯電させて攻撃、伝導性のある物質を経由しての電撃攻撃など幅広い戦法を取れる。

しかし、望は新人類創造計画で創造された影胤や蓮太郎のような機械化兵士ではない。

新人類創造計画第八機械化兵士開発科。またの名を対ガストレア兵器開発科。これが望の作られた場所だ。今となってはあまりにも残酷な人体実験をしていた事が明るみになり、なくなっている。

確かに、新人類創造計画の一端であることは間違いない。だが、そこは一番狂っていた部署だった。イニシエーターが現れてからも人体実験をやめることはなく、ただひたすらにガストレアを駆逐するためだけの兵士、人類を超えた人類をコンセプトに研究していた。

だが、成功例は一つだけ。それが夢見望だ。しかし、唯一の成功例は大成功だった。理論上、イニシエーターや機械化兵士よりも圧倒的に強く、あらゆる面で優れ、ガスト

レアを駆逐するための「兵器」としては最高傑作のはずだった。

しかし、開発者たちは忘れていた。「兵器」に「心」は必要無い事を。望は意識を取り戻したあと、タイミングを見計らい、記憶を頼りに脱走。紆余曲折があつた末に現在に至る。研究所は望が脱走したことで、存在が明るみになり、それが発端で潰れたのはまた別の話である。

そのためか、望は極端に自分を卑下する。自分は「ヒト」ではなく「兵器」である。だから、今も兵器である今の右腕では希に自分から触ることに躊躇いを感じている。

望の顔は酷く寂しそうな顔をして、呟いた。

「研究所の奴らには感謝こそすれ、恨んだりはしてない。希を守れる力をくれたんだからな」

望は右腕ではなく、左腕で希の頭を優しく撫でる。希は幸せそうに目を細めた。今の希を見た人は十中八九、老若男女問わず骨抜きにされることだろう。

「兵器」の兄と「化物」の妹に訪れる優しい時間。望もこれを見られたら、流石に言い訳できないよなど現実逃避気味の苦笑をこぼす。希は兄の苦笑に気付かず、ジツと兄の瞳を見ていた。

ヤルなら今でしょ。

希の脳内にそんな考えがよぎる。そして、その考えに希は忠実に従う事にした。別に

問題なんて無いのだから、と。

希は望に向き合い、望の首に手を回す。そして、ゆっくりゆっくりと顔を近付ける。いつもの希が好きなの兄の優しい匂いが希の鼻腔をくすぐる。十センチ程しか離れていないこの距離が物凄く遠くに感じた。希には焦ったした望の顔が、望には熱っぽい超絶美少女の顔がだんだんと迫っていく。

時計の秒針の音が遙か彼方に聴こえる。

あと五センチ。

唇と唇が触れあつ……

エフエックスジツキョウガミタイー、エフエックスジツキョウガミタイー

時が止まった。間違い無く、今、二人の時は止まっている。そして、当然のように訪れる気恥ずかしさと気不味さ。先に希がぎこちなく再起動した。

「こ、こんな可愛く甘えてくる妹がいて兄ちゃん冥利に尽きるけど、仕事のことだからちよつといいか？」

「え、ああ、うん。も、もう、に、兄さんったら、私と仕事とどっちが大事なんですか？」  
希はそう軽口を言いつつも静々と離れ、隣りにぼすんと座る。顔が真っ赤なのは言わずもがな。正直、望も今の自分を鏡で見る勇氣はこれっぽっちもない。

とりあえず、邪魔をしたのか救いの手を差し伸べたのかどうかは判断しかねる件の

メールを開封する。

内容はやはり影胤追討命令の連絡だった。二日後に政府主権の大体的な影胤追撃作戦が開始されるそうだ。政府にしてみたら、いてもたってもいられないようだ。どうせ自分たちの身の保身しか考えてなくせに良いご身分な事この上ない。

「希、今日から二日後に仕事が入った。一緒に行つてくれるか？」

望の声は先程の気恥ずかしさを微塵も感じさせず、落ち着き払っていた。

「ふあは、はい！えと、あのその……」

しかし、希の方はそうもいかず、女の子らしからぬ声を出してしまっていたが、小学生の少女にあんなことになつても冷静でいろというのも酷な話だ。どんなに修羅場や地獄をくぐり抜けてこようと子どもであることに変わりはない。それはもちろん望にも言えることだった。

「コホン、兄さんがいる所なら何処にでも私は着いて行く。例え、兄さんが嫌がつてもね！」

一度、咳払いをしていつもの調子を取り戻した希は照れ隠しついでにストーカー宣言を声高らかにする。それに対し、望は困った様な嬉しい様な顔をしてしまう。

「これだったら、兄ちゃんは希に嫁ぐしかないな。というか、この手に限る」

「そうだよ。兄さんは希の物だもん。誰にも渡さないから！」

「それは良い話だ。とんだイチャイチャ自堕落ライフが目に見えるな」

二人はあまりにも出来の悪い冗談にクスクスと笑い合う。さっきまでの気不味さはもう何処にもない。

しかし、笑い合つ中で望はふと思う。

今まで望は希が望む物は全て与えてきた。しかし、希はとても賢い子だったので、我儘はほとんど言つた事が無い。いつも兄さんが居てくれればそれで良いと言つてくれた。兄馬鹿が入つているとしても、とても優しく良い子に育つてくれた。

けれども、もし、もしも希が冗談ではなく、本気で自分を望自身を望んだとしたら、果たして自分はどうしするのだろう。さっきのキス未遂も本当はどうするべきだったのだろうか。

意外とこれは非常に由々しき問題なのでは、と望は頭を悩ませるより他なかった。



くおまけく

「さてと、今日はもう寝るか」

望は自室に戻り、ベッドに潜り込む。すると、見計らったように部屋のドアが開けられた。

「兄さん、一緒に寝よっ!」

「いいよ」

「……ちよつと待つて兄さん。あまりにも返事早くない?」

「何でつて言われてもな……つーか、二週間前にも一緒に寝ただろ」

「まあ、そうだけど……お約束があるでしょ、普通。兄妹で寝るのはおかしいだろ的なくだりが」

「兄妹で寝る事の何がおかしい!別に問題ないだろ。妹と寝るけど愛さえあれば関係ないよね!」

「相変わらず異性として見られてない気がして、希は悲しいよ」

「そんなことはないぞ、マイリトルシスター。真のシスコンにはYesシスターNoタッチという不文律があつてだな。妹を異性として見ているけれども、決して手は出さない。常に妹の幸せを願う者こそが真のシスコンというものよ……つて寝るなよ!」

「はいはい、兄さん愛してるよ!」

「適当な返事なはずなのにどこかに捻くれた愛を感じる……」

「きも」

「ごめんなさい調子乗りました。マジトーンとか死にたくなる」

「それより兄さんくつつき過ぎ！」

「仕方ないだろ。最近、希も大つきくなってきたるんだから」

「ど、どこ見て言ってるの?!」

「希の逆側向いて言ってる。ちなみに兄ちゃんの好みは小さ過ぎず、大き過ぎずだ」

「いや、別に聴いてないし」

「違うの?!」

「違うよ!……ふわぁもう寝る。おやすみ」

「ああ、おやすみ希」